



宮司プレス 第百七十二号

彦島八幡宮 宮司 ニューズ

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和三年六月二十九日

◇前号の第百七十一号にも、詳述(しようじゆつ)し、裏のページに写真も掲載していますが、紫陽花(あじさい)の花が、色あざやかに咲いています。紫陽花は、英語では、「ハイドランジア」といまして、ギリシャ語では「水の器(うつわ)」という意味を持ちます。紫陽花という花は、水がよく似合(にあ)う植物のようです。さて、六月も余すところ今日と明日の二日となりました。六月は、旧暦で「水無月(みなづき)」と呼ばれます。大和言葉(やまとことば)の「みなづき」に「水無月」という感じが当てられました。「水無月」に「無」が入っているから

と云って、「水のない月」なのではありません。むしろ、その逆でありまして、「無(な)」は、「の」の役割をする連体助詞(れんたいじよし)になりますので、「水の月」というのが正しいのであります。

◇渠(きよ)なりて水到(いた)る」という故事(こじ)があります。渠(きよ)というのは、「水の器」でもありますが、人工的にこしらえられた、大きな溝(みぞ)のことです。古

(いにしえ)の唐(もろこし)で、大きな溝を造られたのですが、なかなか、水が流れてこない、ある日、大雨が降ったら、乾(かわ)いた田を美田(びでん)に変えるような、滔々(とうとう)とした水の流れが、生(しょう)じたという故事です。大きなことを為すためには、情熱(じやうねつ)を注(そそ)ぎ、一生懸命(いっしょうけんめい)に努力(なうりく)を怠(おこた)らず、そして、天地(あめつち)の恵(めぐみ)を仰(たの)むという、「人事(じんじ)をつくして天命(てんめい)を待つ」という教えでもあります。中国(ちゆうごく)の易経(えいききょう)にも、「終日(あした)に乾乾(けんけん)、夕(ゆふ)べに惕若(てきじやく)とあります。「今日(けふ)一日(いちにち)頑張(がんぢやう)るぞ!」と一生懸命(いっしょうけんめい)に生きる、人事(じんじ)を尽くすわけです。そして一日(いちにち)が終わると、至(いた)らぬところを反省(はんげん)し、「また明日(あした)は、今日(けふ)よりもっとよくしよう」、「一足(いちそく)飛びにはいかずとも少しづつ前に進(すす)もう」と誓(ちか)いを立て、神仏(しんぶつ)の御加護(ごかご)を願(ねが)うのです。その「終日(あした)に乾乾(けんけん)、夕(ゆふ)べに惕若(てきじやく)若(わか)のお祭(まつり)りが、明後日(あした)の「水無月(みなづき)の大祓式(おほはらいしき)、来月(らいげつ)三十日(さんじゅうにち)の夏越祭(なごしさい)」であります。私共(わがら)では、この二

つのお祭(まつり)りを「夏越大祓(なごしのおほはらい)」として、齋行(さいこう)しています。今年の下半年(かこうはん)、コロナ禍(コロナか)ということもあり、「葦船(あしぶね)」に乗(の)せて流(なが)してしまいたいことばかりだったのではないのでしょうか。しかしながら、「過去(かこ)と現在(げんざい)は変(か)えられないが、未来(みらい)は変(か)えられる」のであります。

◇新古今和歌集(しんきんわかしむ)にも、「水無月(みなづき)の夏越(なごし)の祓(はらい)する人は千歳(ちとせ)の命(いのち)延(の)ぶと云(い)ふなり」と詠(よ)まれてい

るに、過去(かこ)と現在(げんざい)、さらに未来(みらい)をも清(きよ)める、古(いにし)き良(よ)き伝統(でんとう)の神事(かみぎ)が、「夏越大祓(なごしのおほはらい)」なのです。民俗学(みんぞくがく)者(しや)で国文学(こくがく)者(しや)でもあり歌人(かじん)は、このような日本古来のしきたりや、年中行事(なかつくし)を「生活(せいかつ)の古典(こてん)」と呼ばれました。御先祖様(ごせんぞさま)が続(つ)けてこられた、しきたりや神事(かみぎ)に従(したが)うことで、私たちの日々(ひび)の暮(く)らしにも、安(やす)らぎが得(え)られているような気がしてなりません。また、同じく民俗学(みんぞくがく)者(しや)の柳田国男(やなぎたにくに)さんも、「敬神(けいじん)は要(よ)するに道徳(みちとく)である」と仰(おほ)つしや)っておられます。コロナ禍(コロナか)でも、感染(かんせん)の拡大(かくたい)を防(ぼう)ぐ様(よう)々な手立(てだて)である「渠(きよ)は、関係(かんけい)各位(ごい)の御尽力(ごじんりき)により出来上(できあがり)が

つています。私共(わがら)も、今(いま)少し人事(じんじ)を尽(つく)し

つつ、天命を待ち、コロナ禍の前の、滔々とした水の流れのような日々が訪れることを信じたいものです。その過程においては、「生活の古典」である、神事、しきたりを大切に、「要するに日本人の道徳」である敬神生活を心がけなければなりません。そのためにも、雨で一層(いつそう)輝きを増す紫陽花のように、何事も、「終日に乾乾、夕べに惕若」という謙虚(けんきよ)で寛容(かんよう)な心を忘れてはならないのではないのでしょうか。御自愛を祈ります。

◇六月の祭典行事報告

▼月次祭 *六月一日、十五日

▼貴布祢神社、貴布祢稻荷神社月次祭

*六月一日

▼海士郷恵比寿神社例祭 *六月十日

▼貴布祢稻荷神社例祭 *六月十二日

▼朝粥会 *六月二十一日

▼楼門(ろうもん)に夏越祭の広報活動です



▼大祓式 *六月三十日

◇六月の宮司動静予定(報告も含む)

▼彦島八幡宮関係団体

□維蘇志会奉仕作業 *六月六日

□奉賛会茅の輪奉製奉仕作業

*六月二十七日



*六月十八日

▼講演活動

□山口県神社庁初任神職研修会「神社本

庁史」講義(二時限五十分授業の六コ

マ五時間) *六月十一日

□下関市中央倫理法人会セミナーニングセ

ミナー卓話 *六月十七日

▼その他

□しものせき木鶏クラブ例会*六月一日

※月刊「致知」五月号、六月号の読後感話会

□社会福祉法人あーす評議員会

*六月十九日

□社会福祉法人松美会評議員会

*六月十九日

□色紙を頒布(はんど)しています



□御神殿の東側の紫陽花がきれいです



▼山口県神社庁、同下関支部

□山口県神社庁教化部教化委員会

*六月十一日

□山口県神社庁下関支部支部幹事会

*六月十五日

□山口県神社庁役員会

*六月十八日

□山口県神社庁定例協議員会